

木曾三川 治水と文化の交流誌

2008

夏

木曾三川

Vol.67



岐阜県下呂市

ふるさとの街・探訪記

清流きらめく南飛騨の観光都市・下呂市

エリア・リポート

飛騨川(益田川)流域の治山治水

気ままに JOURNEY

山と水の故郷・下呂の文化にふれる旅

コラム 木曾三川 一景一話

河川距離標

歴史ドキュメント 明治改修第七編

堤内地の滞留水対策と低水路計画

TALK&TALK 松田千晴

近代における長良川の舟運(一)

中流域を中心とした川湊の分布と舟運圏の構造



木曾川文庫



清流きらめく南飛驒の

観光都市・下呂市

飛驒山脈に抱かれた下呂市は、南飛驒と呼ばれる地域で、山地を縫って流れる飛驒川とその支流に沿って集落が形成されました。江戸時代には、御用木の伐採・運送に多くの人が携わり、森の恩恵を受けて暮らしていました。現在、温泉や恵まれた自然を活かした観光都市として発展を続けています。

風光明媚な南飛驒

岐阜県の東部中央に位置する下呂市は、飛驒地方南部にあたり昔から益田郡と呼ばれてきた地域です。飛驒山脈が連なる山岳地帯で市域面積約八五一km²のうち九割が山林です。市の中央を飛驒川が山地を縫って南に流れ、小坂川・山之口川・馬瀬川などの支流が合流しています。この飛驒川に沿って走る国道四一号とJR高山本線が主要な交通となっています。

下呂温泉をはじめとする各地の温泉や豊かな自然、時間をかけて育んできた山国の文化を資源とした観光開発が進み四季を通して多くの観光客が訪れる観光地に発展しています。

各地に広まった下呂石

下呂地区の乗政・野尻などから先土器時代のもものとみられる尖頭器や剣片石器が発見されています。また、湯ヶ峰山頂付近で産出する下呂石(ガラス

質黒雲母
石英安山
岩が先土
器時代か
ら弥生時



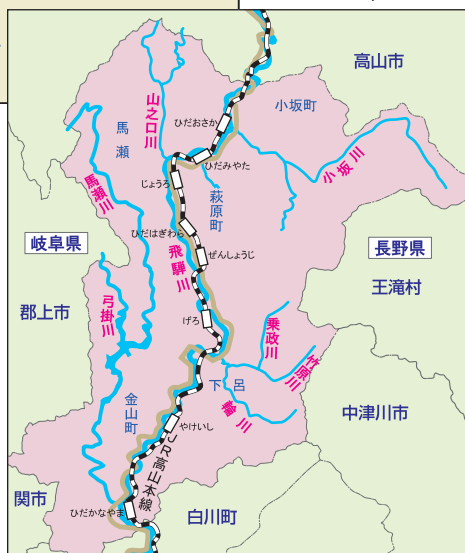
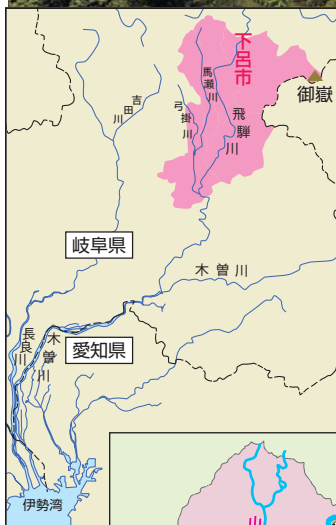
下呂石のモニュメント
(縄文公園入口付近)

代まで長期に渡って石器の材料として用いられていたことが知られており、その分布は岐阜県一円から愛知県・新潟県まで広範囲に及んでいます。こうしたことから、当時すでに、広い地域で人々の交流があったことがわかります。

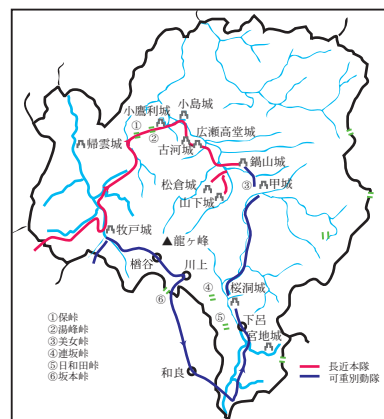
益田郡を基盤とした三木氏の台頭
鎌倉時代を通じて飛驒守護の名はわかっておらず、当地を支配していた氏族についても不明です。室町時代になつて、応永一八年(一四一一)、飛驒国司姉小路氏の反乱に対して室町幕府は飛驒守護京極氏などに鎮圧を命じています。応永飛驒の乱と呼ばれるこの争乱は一カ月程で鎮圧されましたが、その後も姉小路氏は古川盆地に勢力を保っています。

縄文時代の遺跡は、小坂町地区の味屋遺跡・岩井田遺跡・水口遺跡・南垣内遺跡、下呂地区の峰一合遺跡・少々野遺跡、萩原町地区の上畑遺跡など市内各所で数多く発見されています。山間地であるため弥生時代の遺跡は少なく、古墳も特筆すべきものはありません。当地が大和朝廷の支配下に入ったのは五世紀頃で、国郡里制が定められた当初は美濃国大野郡に属していましたが、貞観一二年

この乱の後、京極氏の代官として三木氏が竹原(下呂地区)に派遣され土着したと伝えられています。しかし、三木氏の出自や入部の地・時期については確かな資料がないので、あくまで伝承の域を出ないようです。いずれにしても三木氏は戦国時代の前半には益田



ふるさとの街・探訪記



金森氏の侵攻ルート

郡をほぼ支配下に収め、飛騨でも最大の勢力となっていました。その三木氏も戦国時代後期になると、甲斐・信濃の武田氏や越後の上杉氏、京を押さえた織田・徳川連合といった強大な大名に囲まれ外交に腐心し、三木良頼の時は上杉謙信の属将となり、その子・自綱は織田信長の客将となっています。

織田信長が本能寺で倒れると、自綱は織田家中の内紛の間隙をついて飛騨全土をほぼ平定し一国の大名となって家督を秀綱に譲ります。しかし、豊臣秀吉と徳川家康が対立した小牧・長久手の戦いで秀綱は家康方に加担、戦いが講和によって終結すると秀吉は飛騨の制圧に乗り出します。天正一三年（二五八五）八月、秀吉の命を受けた金森長近・可重父子が越前より侵攻し、各地で三木勢を撃破、松倉城（高山市）陥落によって三木氏は滅亡しました。

高山（金森）藩から幕府領へ

豊臣政権下で飛騨国を与えられた金森長近は、関ヶ原の戦いで徳川方に属し飛騨一国を安堵された上、美濃の上知・関などを加増されました。

金森氏は高山城を本拠とし、飛騨川沿いの下呂・金山間の難所中山七里を

開削するなど主要な街道の整備に努めます。飛騨街道には萩原旅館（萩原地区）下原旅館（金山町地区）が置かれ金森氏通行時の宿舎にあてられました。

また、金森氏は新田開墾や鉱山開発にも力を注ぎ、豊富な山林資源と合せて国力を伸ばしていきますが、こうした資源に着目した幕府は、元禄五年（一六九二）金森氏を出羽上山（山形県上山市）に転封し、以後、飛騨国一円を幕府領としました。

飛騨三郡の中でも益田郡は、飛騨川による運材の便が良いので特に林業が盛んな地域でした。高山藩時代には「山内残らず地頭山」という藩による山林領有を基本として、「出雲守台所木」として藩財政を潤し、耕地の少ない山間の村々の生活を支えていました。

幕府直轄地となつてからも「御用木」として山林経営が行なわれ、多くの人々が携わっていました。伐採作業の中心となったのは南方四八村と称された特に耕地に恵まれない地域で、益田郡では小坂郷一一村（小坂町地区）が含まれていました。これらの村人は、立木を伐り倒して渡場まで運ぶ元伐稼を

生業とし、自村の山以外にも出稼ぎに出て各地の山を転々としていました。渡場まで運ばれた材



金森長近



元伐之図（部分）中部森林管理局蔵「木曾式伐木運材図会」より

木を下流の綱場に流送する川下げと呼ばれる仕事には飛騨川沿いの萩原町・下呂地区の村々が従事しました。飛騨川の木材流送は、下原の中綱場（下呂市金山町地区）を経て下麻生（加茂郡川辺町）まで管流しされ、ここから太田（美濃加茂市）まで筏で下っていました。元伐、川下げ共に専門の職人集団として飛騨川筋だけでなく北方の白川流域にまで出向いていたようです。

農業生産力の低い益田郡では、山稼ぎとともに養蚕・製糸が極めて重要でした。天保一四年（一八四三）の「三郡余業取調書」は萩原郷・上呂郷・中呂郷などの村について「蚕飼稼第一二仕糸二挽立他国へ売払申候」「女ハ冬春之内紬織立、他国へ売払申候」と記しています。当地で養蚕が盛んになったのは、江戸時代半ばからのようで、享保六年（一七二二）には代官から農民に不相応な養蚕を戒める通達が出ていた

ものが、安永〜文化年間には郡代が養蚕を奨励し、全国から良質の蚕種を手する便宜を図っています。飛騨の生糸・紬は品質が優良なことで定評がありました。その主要な産地は益田郡で、一般に飛騨紬と呼ばれるものも大半は益田紬でした。

明治以降、養蚕はますます盛んになり、製糸業も農家による手挽きから蒸気器械を使った工場生産に移行し、戦前まで主要産業として地域経済を支えてきました。



森の第六工場における作業風景（昭和10年）

洪水と闘ってきた下呂温泉

下呂温泉の起源については、「白鷺伝説」や「薬師伝説」などが伝承されていますが、起源を示す確かな史料はありません。最も古い文献として相国寺の万里集九が『梅花無尽蔵』で「我が国六〇余州にはそれぞれ霊湯があるが、その中で最もいいのは草津・有馬・下呂の三カ所である」と書いています。

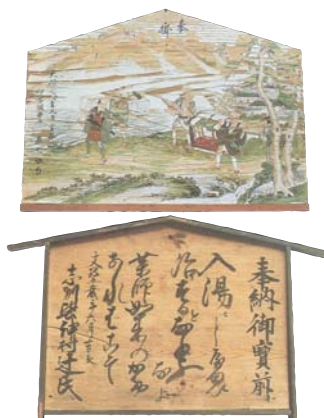
江戸時代の『飛騨国中案内』には「湯之島村は宿場で、この宿の下を流れる益田川原に名湯の温泉がある。……名湯ゆえに湯治客も多く繁昌している。」とあります。明治八年の「下呂湯之島温泉取調書」にも「往古は不明であるが、天明年間（一七八一〜一八九）から文政・天保年間（一八一八〜一八四四）にかけての

ふるさとの街・探訪記

繁昌の折には、年間およそ二万六千人から三万人の湯治客があつた。」と書かれているので、すでにかなり賑わっていたようです。

しかし、盛況だった下呂温泉は、一方でたびたび襲う飛騨川の洪水との闘いを繰り返してきました。ボーリング技術などない当時は、飛騨川の川原に自然に湧き出す源泉から湯を引いて温泉場を造っていましたから、ひとたび川が氾濫すると川原にある温泉場はひとたまりもなく押し流されてしまいました。

最も大きな災害となったのは、文政八年（一八二五）八月一四日の氾濫で温泉場は跡形もなく壊滅しました。前出「下呂湯之島温泉取調書」によれば「古今稀なる洪水となり、耕地や川岸が数十間にわたって押し流された。川原の温泉場はもちろん、水防の石積も壊滅し、村は廃退の状態であつた。」という有様でした。この復興にあたって、湯之島村は、村の力だけでは復旧できないので普請手当を高山役所に願ひ出ますが、高山役所から助成は得られず、



温泉寺に奉納された絵馬

必要な工費を地元の資産家などから一〇年賦無利子で借りています。工事は天保三年（一八三二）までかかり、途絶えていた湯治客も次第に増え盛況時の活況を取り戻すかに見えましたが、間のない天保七、八年の洪水で温泉場のあつた川原は完全に水没してしまいました。復興のため、湯道の探索が続けられましたが、営業に値する源泉を見つけることができないまま明治を迎え、新しく源泉が発見されたのは、水没から四〇年近く経った明治九年（一八七六）でした。

梅村速水と萩原戦争

明治維新の慶応四年（一八六八）、幕府直轄地であつた飛騨は高山県となり、初代県知事に梅村速水が就任しました。廃藩置県が行なわれたのは明治四年（一八七二）ですから、高山県は政府が任命した知事による執政のさきがけとなりました。梅村は、水戸藩出身の勤皇志士で、二八歳で着任すると、組織を一新し新しい政策を次々と打ち出しました。



梅村速水

しかし、梅村の急進的な政策は、高山町方などの反発を招き、明治二年には高山商人の中に京都の新政府に梅村の排斥を画策

する者が現れました。この動きを阻止しようと梅村も京都に向きとしました。この間に高山県内各地で反梅村の暴動が起こったため新政府は梅村を咎め高山県に帰ることを禁じました。この命令を無視して梅村は高山に戻るため飛騨街道を北上しました。これを知った反梅村派は徒党を組んで高山方面から大挙して益田郡に押し寄せ、萩原宿に投宿していた梅村を襲いました。梅村隊との間で激しい戦闘が行なわれ、町が火の海となったこの事件は「萩原戦争」と呼ばれたほどの大騒動でした。直後の梅村知事解任で一連の「梅村騒動」は終結しました。

騒動の後、明治四年（一八七二）に高山県は廃止され信濃と併せて筑摩県となりますが、明治九年に飛騨三郡は岐阜県へ編入、明治三〇年（一八九七）萩原に益田郡役所が独立設置され郡制が施行されています。

「観光立市」による発展を目指して

明治後期の益田郡には一カ村がありました。その後、合併・移管・編入を経て、昭和三年（一九五六）に下呂町・萩原町・金山町・小坂町・馬瀬村の四町一村の郡域が確定され、平成



梅村速水が祀られている宮谷神明宮

一六年三月には、四町一村が合併して現在の下呂市が誕生しました。以来、市では「ふるさとを感じる森と清流、人とまちが響きあう健康と交流のまち・下呂市」を将来像に、下呂・濁河など各地に点在する温泉や「飛騨木曾川国定公園」「岐阜県立自然公園」に代表される豊かな自然を活かし、健康をキーワードにした「観光立市」を掲げ観光都市としての更なる発展を目指しています。



飛騨川を中央に広がる温泉街

参考文献

- 『飛騨下呂 通史・民俗』平成二年 下呂町
- 『萩原の維新と梅村騒動』平成元年 萩原町教育委員会
- 『岐阜県の地名』平成元年 平凡社
- 『岐阜県治水史』昭和二十八年 岐阜県

木曾三川 一景一話

今号の一景 河川距離標

河川距離標は河川の番地

堤防の川側の肩に「河川距離標」と呼ばれる「杭」が設置されていることをご存知でしょうか。河川管理のための重要な基準点です。かつては、木杭や石杭が用いられていましたが、現在では、ほとんど



写真①油島締切堤の標識

コンクリート製の杭が用いられています。私たちの家や土地は「番地」で表しますが、河川の中では、その位置は「河川距離標」を基準として上流側では「+」、下流側では「-」で表します。たとえば、河川距離標「10.2k」より5m上流の位置は「10.2k+5」と表し、35m下流の位置は「10.2k-35」と表します。

国が管理している河川の管理区域では、河川の両側にある堤防のり面には、大体200m間隔で「河川距離標」が設置されています。堤防の上を通行したり、散策している時には、周辺の景色に目線があるため、「河川距離標」そのものに、気づくことは少ないのですが、写真①のような標識が目に入ります。



写真②長良川 10km地点の河川距離標

「河川距離標」の横には、位置とその表示が、容易に分かるように標識が立てられています。5km間隔では、写真②のように「河口よりの距離」として表されています。

川の中心で表す河川距離

しかし、この「河川距離標」の間隔をよく観察すると、200mより長かったり、また、短く感じる場合があります。これは「河川距離標」は、堤防の上の間隔ではなく、川の中心の距離を表しているからです。「河川距離標」の設置に当たって



高潮堤防区域の河川距離標

は、河口の川の中心を起点として、川の中心に沿って200m間隔に、川の中心に直角方向の堤防のり面に設置されます。従って、河川が湾曲している場合は、外側となる堤防では河川距離標の間隔は200mより長く、反対に内側では短くなっています。



油島締切堤の河川距離標

デ・レーケの提案により始まる

明治政府は、発足とともに全国統一した治水行政に取り組み、明治4年(1872)2月には、各府藩県へ太政官布達を發布しました。その中に「千間毎に堤外へ定杭」や「堤内百間毎に小杭」の設置を定めていますが、これは現在の「河川距離標」ではなく、河川区域を示す「用地境界杭」に近いものでした。

現在みられるような「河川距離標」の設置は、ヨハネス・デ・レーケが提案したことに始まります。デ・レーケが明治11年(1877)に木曾三川を調査して、その結果を「木曾川下流概説書」として報告していることはよく知られていますが、その中に「距離標」に関して次のように提案しています。

『標識 前野村ノ下流ヨリ海口ニ至ルノ間、仮定メタル新木曾川ノ河床ニ標杭ヲ設クヘシ、此ノ杭ハ距離毎式丁ニシテ凡流心トナルヘキ所ヲ測リコレヲ傍フテ設置シ、而シテコレヲ図上ニ記載スベシ。』

現在では、このようにして設置された明治時代の河川距離標を見ることができませんが、当時の図面には、二丁(約218m)間隔に河川距離標が書き込まれ、分子には「里」、分母に「丁」が表示され「丁杭」と呼ばれていました。

現在のようにメートル表示とされたのは昭和初期と思われます。この時、河川距離標の位置も変更されたものと思われますが、基点となる「〇・〇」の位置は、従来の位置が使用されました。その結果、揖斐川では「0.0k- 0.6」、長良川では「0.0k -1.0」のようにマイナス表示の河川距離標が出現しました。



明治時代の河川距離標の位置が示された図

河辞苑

※河川に関する用語をわかりやすく解説します。
木曾川水系流域委員会 用語集より

◆右岸と左岸

河川を上流から下流に向かって眺めたとき。右側を右岸(うがん)。左側を左岸(さがん)と呼びます。

◆川表と川裏

堤防の水が流れている方(堤外地側)を川表(かわおもて)。住居や農地などがある方(堤内地側)を川裏(かわうら)と呼びます。

AREA REPORT

岐阜県下呂市

飛驒川（益田川）流域の

治山治水

益田郡を流れる飛驒川は、昔から益田川と呼ばれ、木材流送や耕地を潤す水源として人々の暮らしと密接に関わってきました。一方で、流域の人々は、川の氾濫や背後の山々の土砂災害と永年闘ってきました。その治山治水の一端を紹介します。



益田川（金山町地区）



益田川（下呂地区）



益田川（萩原町地区）

益田川と呼ばれた飛驒川上流部

飛驒川は、乗鞍岳（標高三〇二六m）の南斜面を源流に西に流れ、高山市久々野で南に流れをかせ、小坂川・馬瀬川・白川などを合せて美濃加茂市内で木曽川に合流する木曽川第一の支流です。流域すべて山間地で、流路延長約一五〇kmのほとんどが急峻なV字谷を形成しています。しかし、国道四一号を北上すると、下呂温泉に近づく辺りからそれまで深い谷底を急流が流れていた渓谷の景観が、川幅が広く護岸堤防が造られた平地の河川風景に変わります。萩原町地区から下呂地区にかけて、緩やかな鍋状の河谷となっており、さらに上流で再びV字谷となっています。この鍋状地形は阿寺断層の活動が繰り返えされた結果出来たもので、川沿いに山間地にとって貴重な平坦地が開け、集落が形成されました。

飛驒川の名称はもと、馬瀬川合流点より下流の主に美濃地方での呼び名で、上流の飛驒地方では益田川と言

いました。河川法で名称が飛驒川と規定されてからも、地元では慣れ親しんできた益田川と呼んでいます。

江戸時代の益田川氾濫

平時でも水量の豊富な益田川は、V字谷から平坦地に流入するため頻繁に洪水被害が起こっていました。『岐阜県治水史』の洪水年表には江戸時代に一五ほどの益田川洪水の記録が見られますが、実際には数多く氾濫を繰り返していたことでしょう。

飛驒国におけるこうした災害の復旧など治水・用水・道橋の普請は、元禄五年（二六九二）の幕府領への移行後、公儀御入用普請と、普請場所を定めた百姓役普請に分けられ、それ以外は百姓自普請とされました。益田郡では益田川・小坂川・馬瀬川筋の八カ郷が百姓役普請による川除普請個所に指定されています（元禄一六年指定）。百姓役普請は規模によって人足を出す範囲が変わり、大規模な普請は国中の村で負担する国中余荷普請となりました。最

初の国中余荷普請による治水事業は、元禄一二年（二六九九）初代飛驒代官伊奈忠篤によって行なわれ、付近山林より材木を下付し、国中村々一〇〇石につき一〇〇人の村役人足を課し、人足には扶持米を下付したとされています。同様な方法で、元禄一五、一六年、宝永六年（一七〇九）に川除普請が行なわれています。

国中余荷普請は、普請場所の無い村も費用を分担する一種の相互扶助制度でしたが、総額が増え村々は負担に耐えられなくなっていく、天明四年（一七八四）から一部街道難所を除いては中断され郷限普請に切り替えられました。その後、寛政年間に普請金の限度額を設けて復活しました。

梅村堤防と羽根新田

国中余荷普請で行なわれた工事は、街道や河川の災害復旧がほとんどで、新田開発は、主に商人や村の有力者といった資産家の出資によって行なわれました。岐阜県萩原総合庁舎のある一

AREA REPORT



功績碑

羽根新田はその代表的なもので、梅村の勸農政策に応じて羽根村から提出された七二〇〇mの用水路と益田川堤防の建設計画を、知事の取り計らいで新政府の事業として実行にうつし開発され



梅村堤防

帯は、益田川沿いでもっとも平坦地が広がっている地域で、今でこそ水田が広がり住宅や工場などが立ち並んでいますが、江戸時代は幾度か新田開発が試みられたものの川の氾濫によって期待した成果が得られない地域でした。本格的に新田開発がなされたのは明治になってからで、「羽根新田」と呼ばれました。開発の中心となったのは、明治維新で初代高山県知事として赴任した梅村速水でした。梅村の執政は約一年という短いものでしたが、そのわずかな期間の中で実に多くの政策を実行しています。とりわけ農業振興に力を注ぎ、各地で河川改修や新田開発に着手しました。

た約三七haの新田です。

益田川にかかる飛騨川大橋の右岸下流に羽根新田を洪水から守るために「どんこつ積み」と呼ばれる工法を用いて積み上げられた石積堤が残っています。堤は開発に尽力した知事にちなんで「梅村堤防」と呼ばれています。

新田開発による恩恵を受けた羽根の人々は梅村を宮谷神明宮に祀り、また、その功績を忘れることなく明治三三年（一九〇〇）に梅村達の功績碑を建立しました。現在、功績碑は新田の北部にある白山公園に移され豊かな実りを見守っています。

デ・レーケの益田郡視察

河川の氾濫とともに益田川流域の人々に大きな脅威となっていたのは、間近に迫る背後の山々の土砂災害でした。江戸時代の記録に残っている大規模な災害に、安永元年（一七七二）の「下呂抜け」と安永五年（一七七六）数百カ所で山崩れが起こったという「下呂の八百八抜け」があります。

運材に便利な益田川周辺の山々は、江戸時代初期には刈り尽くされてしまったから、土砂災害はしばしばおこっていたはずですが、本格的な砂防工事は、明治新政府がデ・レーケらの進言によって土砂流出防止工事を進めるようになってからです。

明治一三年（一八八〇）七月、初めて木曾川流域の山地崩壊場所を視

察してまわったデ・レーケは、恵那郡加子母（中津川市加子母）から益田郡に入っています。随行した佐田六等属の出張日記には、

「同月八日」加子母ヲ発ス、御厩野村ヲ徑下呂村ニ至ル、同村字湯ノ峯及柵洞ノ崩所ヲ検ス、工師工法ヲ陳ブ。午後七時該村ニ泊ス。

「同月九日」下呂ヲ発ス、金山駅ニ喫飯シテ、途中大山川小横上之村等ノ緒山ヲ遠望ス。午後九時関村ニ達ス。此日道程十七里余、山路險悪工師大ニ疲ル、関村ニ泊ス。

とあり、デ・レーケ自身が、エッセルに宛てた書簡の中でも、この時の様子を「あなたは、私が送ったローマ字で表した日本地図を持っているとありますが、それをご覧になったら、私がお話しする中山道の旅が理解できると思います。それは大変思い出深い旅でしたが、特に、飛騨を通る迂回路は歩くところが多かったので大変疲れました。」と書いています。日記にあるように益田郡の視察では、下呂村の湯ヶ峰・柵洞の崩壊箇所を調査して砂防工法の指導を行なっています。

その柵洞

で、明治一九年（一八八六



湯ヶ峰



小川谷の巨石積堰堤

頃、飛騨川水系で最初の砂防工事が内務省直轄によって始まりしました。その後、工事の中断があり、明治三九年には山麓の県道まで流失する大崩壊もあって、すべての工事が完了したのは大正三年でした。柵洞と同時に下呂村の小川谷でも着工され、谷筋の要所に石堰堤を築いていきました。小川谷には、今でも砂防の役割を十分に果たしている巨石積堰堤が現存しており、この当時のものと思われる。

参考文献

- 『飛騨下呂 通史・民俗』平成二年 下呂町
- 『萩原の維新と梅村騒動』平成元年 萩原町教育委員会
- 『岐阜県の地名』平成元年 平凡社
- 『岐阜県治水史』昭和二十八年 岐阜県
- 『木曾三川流域史』平成四年 中部地方整備局

気ままに JOURNEY

岐阜県下呂市

山と水の故郷・

下呂の文化にふれる旅

雄大な飛騨山脈とそこに端を発する豊かな清流に恵まれた岐阜県下呂市。大自然の恵みはこの地に数多くの文化をはぐくみ、名泉と名高い温泉地として訪れる人々の心と体を癒してきました。湯治客を魅了しつづける下呂の歴史と文化をたどり、その神秘にふれる旅へとかけてみることにいたしました。

飛騨街道の難所・中山七里

初夏の陽光がまぶしい国道四一号を北に向かい下呂市に入ってしばらく行くと飛騨路を代表する景勝地・中山七里に



中山七里(牙岩付近)

さしかかります。飛騨木曾川国定公園の一面を占め、屏風岩や羅漢岩など見たえのある巨岩奇石の数々や春から初夏にかけ、岩の間に咲くつつじの可憐な姿、夏は新緑、秋には紅葉と四季折々に自然のアートを堪能できます。

ここ下呂市は、雄大な飛騨山脈に抱かれた急峻な地。豊かな森と清流に恵まれた山国の歴史と文化を訪ねてみましょう。

名泉の白鷺伝説を訪ねて

国道四一号を北へ走っていくと「歓迎 下呂温泉」へというアーチ型の看板に出合います。誘われるようにその看板をくぐれば、日本三名泉に数えら

れる温泉街が飛騨川を中心に広がります。街の中央で飛騨川に注ぐ阿多野谷川沿いの散策路には、カランコロンと下駄の音。タオル片手に浴衣姿の湯めぐり客。温泉街の風情が漂います。

この地には源泉の起源にまつわる「白鷺伝説」が伝わっています。

下呂温泉は約千年前、湯ヶ峰に湧出していたといわれ、この湧出地は頂上付近で、今でも湯壺の跡が残っています。しかし、文永二年(一二六五)の大地震で湧き出していた温泉が突然止まり、村人が困りはてていたとき、一羽の白鷺が益田川の河原に舞い降りて、新しい源泉を村人に知らせたのだそうです。

その白鷺が消えた跡に残されていたという薬師如来像が祀られているのが温泉街の高台にある温泉寺。寛文十一年(一六七二)に臨済宗妙心寺派の禪寺として建立された温泉寺には、温泉の歴史を記した「湯文」や絵馬など貴重な文化財も所蔵されています。

麓の地藏堂から長く続く一七三段目の石段を登って、ようやく辿り着く山

門。山門を抜け境内に入ると、そこからは下呂の町並みが一望できます。吹き抜ける爽やかな風が、汗をかいだ額や頬を撫でていきます。江戸時代の湯治客もこの風を受け、登段した達成感に浸ったことでしょう。

いにしえへとタイムスリップ

温泉街の東、弘法山のなだらかな丘陵地にある下呂温泉合掌村では、世界遺産となった飛騨白川郷から合掌家屋が移築され、往時の生活をうかがい知ることが出来ます。

なかでも一際目を引く「旧大戸家住宅」は、御母衣ダム建設の際に水没する場所にあつたもので、天保四年(一八三三)から弘化三年(一八四六)まで一三年をかけて建造された国指定重要民俗文化財です。間口二一m、奥行き一二・二m、高さ一三mの切妻茅葺き合



旧大戸家住宅(合掌村)

掌造りでは最大級のものです。

村内で人気の演芸館だった「しらさぎ座」が、平成二〇

年七月二〇日(日)からリニューアルオープンして、国内唯一の常設影絵上演館に変わります。「お美津きつね」など下呂市に伝わる伝説や昔話を、地域の暮らしや文化が織り交ぜて、ノスタルジックな影絵で上演していくとのこと、下呂の歴史や文化にふれる絶好のスポットとして期待がふくらみます。

合掌村からさらに東へ歩くと飛騨川の支流に架かる縄文橋という歩行者専用の橋があります。合掌村と縄文公園を結ぶこの橋は、温泉街を一望できる穴場のビューポイントです。

縄文橋を渡るとそこは、次の目的地の縄文公園。昭和四十一年以来の発掘調査で出てきた縄文時代から弥生時代の住居が復元して公開され、隣接するふると歴史記念館には、公園から出土した資料が展示されています。山並み



しらさぎ座(合掌村)



縄文公園

を借景にたたずむ太古の家屋。タイムスリップしたかのようなその情景と開放感が心が解き放たれていきます。

先人の残した遺産を堪能

下呂温泉をあとに、飛騨川の流れを遡るように走っていると、併走するJR高山線の単線が山郷の景観に馴染んで、ふっと童心に返り寄り道したくなるそんな懐かしく素朴な山あいの風景が続きます。

その線路を横切り到着したのは、龍澤山禪昌寺。臨済宗妙心寺派で禅宗でも高い格を持ち、天下十刹に数えられる名刹です。平安時代、高僧恵心僧都(源信)が庵を構え、観世音菩薩を祀り創建したと伝えられています。

戦国時代の再興以来、宋様式の伽藍の威容を誇り、平安様式の建物、茶人・



龍澤山禪昌寺

金森宗近により設けられた茶室、名称指定の庭園「萬歳洞」、雪舟筆「大達磨像」、狩野永徳の「菊花屏風」勅旨お手植えのゆかりの梅などを先人たちの残した遺産を堪能できます。

境内の正面には青々とした山並みがまるで、寺を包みこむように迫り、幽遠な趣きの本堂、樽葺きの屋根に注ぐ柔らかな陽光、雪吊りをかけられた松が心安ぐ一時を与えてくれます。

伝説とともにたたずむ久津八幡宮

萩原駅を過ぎると、右手に飛騨の二の宮として広く信仰を集める久津

八幡宮が見えてきます。創建は、約一六〇年前といわれ、応永十九年(二四一二)再建の本殿と天正九年(二五八二)再建の拝殿は、ともに国の重要文化財に指定され、中世の代表的な建築様式を今に伝えています。玉砂利を踏みしめ、厳かな雰囲気と歴史を感じながら境内を散策します。

拝殿の軒に彫りこまれた「水よぶコイ」は、飛騨の匠の手により作られた伝説のある

彫刻で、今号の民話の小箱で紹介しています。本殿南側の妻に施された「鳴いたウグイス」にも

同様に神秘



久津八幡宮

的な伝説が残されています。

また、本殿の脇にそびえる樹齢一二〇年以上の夫婦杉は国の天然記念物で、上本殿に近い方にある杉を雄杉、もう一方を雌杉といい、台風で二本とも幹の上部を失っています。特に雌杉の方は上部が細く独特の姿をしており、地上八尺(約二四・四m)のところにある豊かな婦人の乳房の形をした樹のこぶから、乳状の樹脂を分泌するため、母乳の少ない産婦から「もらい乳のこぶ」としても信仰されているそうです。

清流のせせらぎの音や四季折々の匂いを運ぶ自然に心癒される、現代人の心の湯治場(ふるさと)下呂の町。その悠々とした歴史と自然がはぐくんできた文化。ノスタルジーを感じ、心の琴線に触れる旅へかけてみませんか。

下呂市の歳時記

◆ 田の神祭り ◆

毎年2月7日から14日までの8日間

稲の豊作を前もって祝う(予祝)という、中世以来の「田遊び」(田楽)の芸能がそのもとになっているといわれる古くから伝承されてきた神事です。別名「花笠まつり」とも言われ、14日の本祭では花笠をかぶった踊り子たちが、舞を披露、会場に設けられたやぐらから一斉に観客にむかって花笠、だんご、小竹箒などを投げ入れ、争奪戦となる場面は圧巻です。

【開催場所】下呂温泉合掌村・森水無八幡神社 国重要無形民俗文化財指定

◆ 今井八幡宮 闘鶏楽 ◆

毎年4月の第1日曜日

闘鶏楽は古くより伝わる飛騨独自の神事で、毎年4月の第1日曜日に開催される宮田まつり(今井八幡宮)に奉納されます。鳥毛のついた花笠をかぶり、色模様の着姿で拝殿いっばいに円を描き、中に「おんどり」を意味する太鼓打ち、外周には「めんどり」の鐘打ちが立ち、古風な歌いながら舞う姿は華やかで壮観。遠方からも参拝客が訪れ賑わいをみせます。

【開催場所】下呂市萩原町 今井八幡宮 下呂市無形文化財指定

イベントカレンダー

・湯屋温泉富士神社寒粥まつり(小坂)	1月中旬
・下呂温泉まつり	8月1日~3日
・ふるさと萩原夏まつり	8月7~8日
・横谷峡滝まつり(金山)	8月13日
・飛騨小坂力持小太郎火まつり	8月14日
・馬瀬川花火大会	8月最終土曜日
・下呂温泉神社祭礼	10月8日
・三輪車8時間耐久レース(萩原)	10月下旬
・飛騨小坂滝ともみじまつり	10月下旬



●交通のご案内●

◆名古屋方面からお車をご利用の方

名古屋 → 宮JCT → 富加関IC → 下呂市
 東名・名神高速道路(約15分) → 東海北陸・東海環状自動車道(約35分) → 奥道58号国道41号(約60分)

◆名古屋方面から公共交通機関をご利用の方

名古屋駅 → JR高山線(約90分) → 下呂駅

●お問い合わせ●

◆下呂市役所◆

〒509-2295 岐阜県下呂市森960番地
 TEL 0576-24-2222(代) <http://www.city.gero.lg.jp/kankou/>

明治改修

第七編

堤内地の滞留水対策と

低水路計画

明治改修の目的のひとつは、輪中内に停滞する悪水の排水でした。デ・レーケは、排水を妨げる土砂堆積を防ぎ、舟運に利するよう低水路を設計し、これを守るケレップ水制を設置しました。また、通船路としてデ・レーケが提案した閘門が船頭平に築造されました。

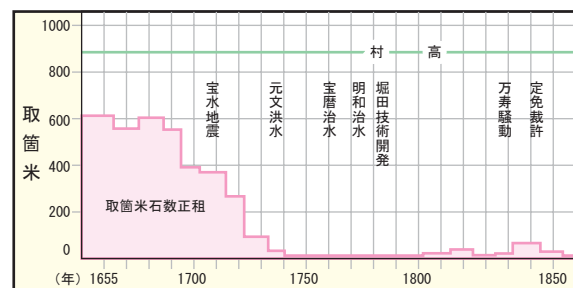
増大する滞留水（悪水）災害

濃尾平野は、西側に傾動する地形を形成しているため、木曽川で氾濫した洪水は、長良川筋から揖斐川筋にまで及んでいました。また、各河川から流出してきた土砂は河道に堆積して河床を高め、平常時も流水を滞留させて、沿岸の多くの輪中からの排水を困難にしました。このため輪中内の耕地は、滞留水（悪水）により浸水し、耕作できない区域が増大してきました。

このような現象は、江戸時代に入り新田開発が盛んになるにつれて顕在化し、木曽三川下流部では深刻な問題となっていました。

延享三年（一七四六）正月には、安八・石津・海西郡（現岐阜県恵四〇ヶ村）の庄屋が連名で、滞留水による災害の状態を次のように多良御役所（高木水行奉行）へ訴えました。「木曽川別而高山より流出申候故、出水之度毎二土砂大分押出、川床埋、常水高罷成申候。美濃国西南各村々之悪水は皆伊尾川へ

落出申候処、木曽川之水高成申候故、伊尾川之水随而高罷成申候……高須輪中悪水一円落不申、年々水損相増悉難儀ニ罷成。」



本阿弥新田の取箇米の変化（「本阿弥輪中」松原義継著より作図）

幕府は、こうした問題を解決するため、延享四年（一七四七）、二本松藩に対して木曽三川改修の御手伝普請を命じました。これにより木曽三川の御手伝普請の歴史が始まりました。

しかし、その後、宝暦治水や明治治水など数々の大普請によっても、滞留水による災害は減少することなく、多くの輪中地域では、高須輪中南部の本阿弥新田における取箇米（年貢）の変化の例に見られるように、収穫が皆無と

なる状態にまで荒廃しました。

安永年間頃（一七七二―一七八〇）に「堀上げ田」の技術が開発されたことによって、耕作地は僅かながら回復しましたが、抜本的な対策が行われない状態で明治改修を迎えました。

明治改修の目的「輪中の排水」

「明治改修」と呼ばれた木曽川下流部の河川改修工事の目的は、木曽川改修工事概要（名古屋土木出張所）に「其目的トスル所ハ高水ノ除害低水ノ改良即チ堤内悪水ノ改良及揖舟ノ便ヲ増進スルニアリテ前二項ヲ最モ重要トセリ」と書かれているように、一、洪水による災害防止。一、堤内地の滞留水（悪水）の排除改善。一、舟運路の確保の三点でした。

特に、堤内地の滞留水（悪水）対策については、「特ニ沿岸ニ低地多ク悪水ノ排除意ノ如ククナラス其耕作物ニ及ホス損害ハ敢テ高水ニ譲ラサルモノアルニ似タリ」（木曽川改修工事（内務省土木局）のように洪水対策と同等の必

要性が認識されていました。

このことは、デ・レーケの指導によって作成された改修計画平面図にも、洪水対策とともに「DRAWING AE OF THE POLDER S」（輪中の排水）と書かれていることから確認できます。

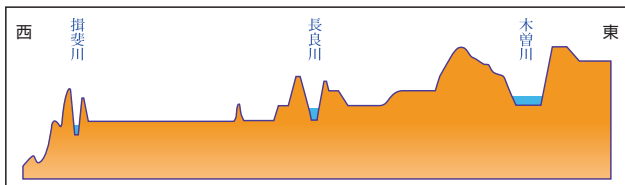
また、木曽川改修工事（内務省土木局）には「治水ノ根本策トシテハ三川ヲ分流セシメ各其特有ノ流量ヲ流下セシメ土砂沈澱ヲ防キ之ニ伴フ損害ヲ除クト同時ニ他川ニ害スルコトナカラシムルニアリ」と書かれているように、この滞留水（悪水）対策のためにも、網目状に乱流している木曽三川を木曽・長良・揖斐の三川に分離することが抜本対策として取組まれたのでした。

広大な被害面積

明治初期の木曽三川下流部の滞留水（悪水）の被害状況については、明治



改修計画平面図（部分）



西側が低い地形

歴史ドキュメント



木曽川の低水路平面

堤内地の排水を妨げている直接の原因は、揖斐川などの河床に堆積した土砂です。デ・レーケは、この土砂の害を無くするために、上流域での砂防を優先的に行うことを力説しました。

一方、改修計画においてデ・レーケは、淀川で舟運のために設計した「低水路」の経験を生かして、木曽三川

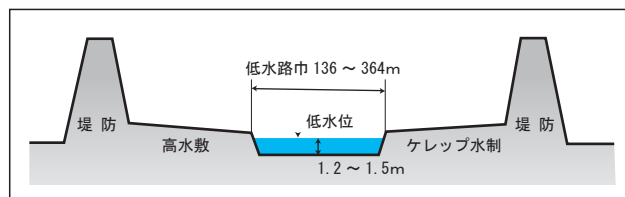
淀川の経験を生かした低水路計画

一年(一八七八)、デ・レーケが、岐阜・愛知・三重の三県に対して実態調査を求めた結果では、岐阜県二二八・〇km、愛知県二四・二km、三重県三七・三kmでした。岐阜県では、このほかに滞留水(悪水)による漬地が一二・八km存在するとしていますから、これを加えると木曽三川下流部の滞留水(悪水)による被害地面積は三〇・二kmに及んでいました。

ちなみに、近年における濃尾平野のゼロメートル地帯(朔望平均満潮面以下の面積)の面積は、約四〇二km昭和六三年度環境庁調べ)ですから、滞留水による被害の大きさが想像できます。

	木曽川	長良川	揖斐川
低水路幅	450～1,200尺 (136～364m)	400～730尺 (121～221m)	200～730尺 (61～221m)
低水路水深	4～5尺 (1.2～1.5m)	4～6尺 (1.2～1.8m)	3～6尺 (0.9～1.8m)

低水路諸元



低水路横断面図

新しい木曽川や長良川、揖斐川には、平常時の河川流量を流す「低水路」を計画しました。

この低水路は、木曽三川の広い川幅の中に、一定の幅と水深をもった水路を作り、この水路に平常時の河川流量を流すものです。

平常時の河川流量は、従来のように中洲によって流れを妨げられることなく、河川勾配に見合った流速を保ちながら、上流から流れてきた土砂を海へ流すことによって、途中での土砂の堆積を防ぎ、結果として木曽三川の平常時の水位を低く保つこととなります。



木曽川低水路の現況

低水路の水深は、土砂を流すための流速や舟運を考えて木曽川では一・二から一・五mとして、低水路幅は、上流端の八神(羽島市)付近では約一三六mとし、河口では約三六四mとしました。

長良川や揖斐川も木曽川と同様な手法によって低水路が

明治改修においては「しゅんせつ」が、中心的な工事でしたが、この「しゅんせつ」は、洪水や平常時の河川水位を低くする低水路開削のための工事でもありました。

三川分離によって、新しい木曽川や長良川の河川敷となった輪中の土地も、この低水路にあたる部分は、掘り下げられて当時の面影もありませんが、高水敷として残された木曽川の海津市成戸や桑名市長島町西川付近、長良川の海津市勝賀、また揖斐川の海津市平田町今尾には、かつての輪中内の土地の面影を見ることが出来ます。

低水路を守るケレップ水制

設計され、この設計にそって、川底の掘削やしゅんせつが行われました。

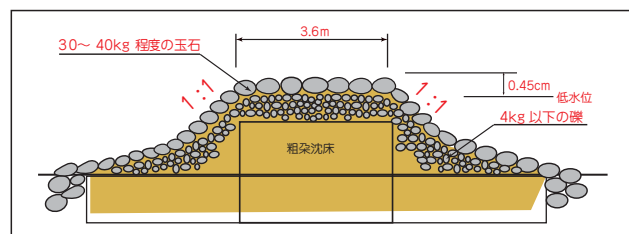
この低水路を守り維持するために、「ケレップ水制」が低水路の要所々々に設置されました。

ケレップ水制は、デ・レーケらオランダ人技師によって我が国に導入された工法ですが、オランダ語の「KRIB」が「ケレップ」と日本語読みされ、また、当時の新聞などには、水制と翻訳されて、ケレップとルビがつけられていることから、次第に、ケレップのことをケレップ水制と呼ぶようになっていきました。

ケレップ水制は、「粗朶」と「土石」を組み合わせた「粗朶沈床」により造られますが、堤防から河川の流れにほぼ直角に川の方

向に突出してもうけるものを「幹部水制」といい、その先端に川の流れに平行して設けられるものを「頭部水制」と呼んでいました。

ケレップ水制は、河川の凹部な



ケレップ水制断面図

歴史ドキュメント



ケレップ水制

当初の施工計画では、「粗朶沈床」のみによるケレップ水制が計画されていましたが、激しい水流による損傷が懸念されたため、表面を玉石によって張り石した「上層工」を施工することに変更



ケレップ水制群の説明

どで堤防に衝突する強い流れをやりわけるために設置されるのですか、木曽三川では、低水路の固定のためにも設置されました。その数は、三九三箇所、その総延長は約六万五千九百mに及びました。

して施工されました。

これらのケレップ水制の多くは、近年の改修工事によって造成された高水敷などによって埋められ、現在ではその姿を各地でみることは出来ませんが、木曽川右岸の立田大橋から上流では、現在も多くのケレップ水制(幹部水制のみ)を見ることが出来ます。

閘門は船頭平へ

低水路は、三川分流成功式が挙行された明治三三年(一九〇〇)四月には、木曽川が完成し、長良川も大須・小藪間を除いて完成していました。残る揖斐川も明治三九年(一九〇六)には河口部を除いて完成し、滞留水の排除に大きく貢献すると共に、安定した舟運路が出現しました。

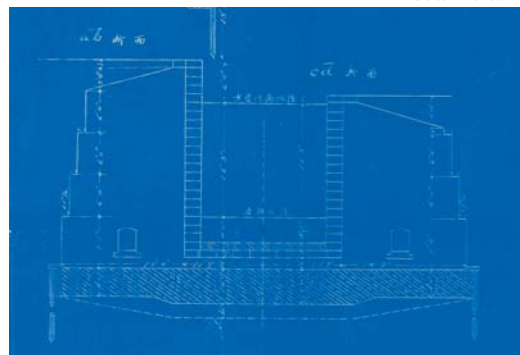
木曽・長良・揖斐の三川を結ぶ通船路については、デ・レーケは木曽川下流概説書において「木曽川ト他ノ両河トノ間ニ通船等ノ為常ニ河水ノ流通ヲ許サズ、唯「シキユットスロイス」(通船度毎ニ開閉スル樋門)ヲ用ヒテ此ノ通路ヲ得ルノミ、此ノ樋門ハ通船ノ為最モ便利ナル場所ヲ撰ビ後日築設スルヲ得ル」と閘門を設置することを提案しています。

しかし、その具体的な位置は示してはなく、政府の当初の改修計画には、その費用も組み込まれていませんでした。そのため、閘門の適地として「船頭平」と「鰻江」が比較検討された結果、

◀船頭平閘門設計書



▼船頭平閘門の設計図



「船頭平」地先に設置することに整理されました。

明治二九年の計画変更の際に閘門の建設が認められ、六八、五〇〇円の予算が計上され、構造設計のための調査が進められました。

この間、明治二七年(一八九四)には、桑名町民などから「船頭平」「鰻江」「青鷺川」の三箇所を閘門を設置するよう国会請願もあり、閘門の着工が目ざされました。

通船路のかなめ「船頭平閘門」の着工

閘門の設計は、青木良三郎内務技師によって行われましたが、我が国では、既に北上川に石井閘門(明治一三年完成)や琵琶湖疎水の天津閘門(明治二二年完成)が完成していましたから、これらの経験を生かすと共に、デ・

歴史ドキュメント

レーケらによってもたされたオランダの技術書「水工技術」(Waterbouwkunde)によって設計したものとみられています。

閘門の規模は、油島地点の船や筏の通航実績から、一日一〇時間の操作として船では四〇〇隻、筏では一五〇枚を通航させるものと

して、閘門の有効長二二〇呎(二六・六m)、幅一八呎(五・四九m)、低水深五呎(一・五二m)として設計されました。また、閘室の大きさは、長さ八〇呎(二四・四m)、底幅一八呎(五・四九m)、側壁は一割勾配の石積みでした。

明治三一年度末(一九九八)には調査設計が終り、明治三三年度には諸材料の調達を開始するとともに、明治三五年(一九〇二)の完成を目指して本格的な工事に着手されました。

■参考引用文献

- 『木曽川改修工事』 大正八年一〇月 内務省土木局
- 『木曽川改修工事概要』 明治四四年一月 内務省名古屋土木出張所
- 『船頭平閘門改築記念誌』 平成八年三月 木曽川下流工事事務所
- 『岐阜県治水史』 昭和二八年 岐阜県



前田虹映筆・岐阜名勝 金華山と鍾秀館雪景 個人蔵



近代における長良川の舟運(一)

中流域を中心とした川湊の分布と舟運圏の構造

松田 千晴 氏



松田 千晴 氏

1955年(昭和30年)岐阜市に生まれる。昭和53年、小学校教員となり以後、岐阜市歴史博物館、岐阜県教育委員会事務局図書館建設推進室、岐阜県博物館等を経て、現在は岐阜市立鷺山小学校勤務。『木曾三川流域誌』(建設省中部地建・平成4年)に執筆他。

一 はじめに

今日では限られた範囲で鵜飼舟が見られる程度になってしまった感のある長良川であるが、かつては流域で生産された物資を運送するために無数の荷

船が往来する、濃尾平野の経済活動にとつては大動脈としての役割を果たす重要河川の一つであった。

ところで、長良川水系における舟運が記録に登場するようになるのは、戦国時代末期・織田信長の時代である。長良川の舟運が内包する重要性に着目していた信長は、美濃国を手中にするやいなや、すぐさま地二元商人による「船薪座」を中河原湊(現岐阜市湊町周辺)に結成させ、領国経営の一環とした。その後、近世に入ると、徳川幕府から新たに岐阜町を増増された尾張藩が、長良川の左岸・金華山の麓に長良川役所なる機関を設置し、長良川を往来する荷船や梓に税を課すなど、長良川水系の河川水運は封建領主の支配下に置かれてきた。

中世末期から近世にかけて、一貫して濃尾平野における経済活動にとって必要不可欠な存在であった長良川の舟運の重要性は、近代に入ってもまったく変わらなかった、といっても過言ではない。

二 舟運の展開状況

近代初頭における長良川水系の舟運がどのように展開されていたのか、ということをも具体的に把握する手がかりとして、『明治一四年 岐阜警察署直轄 渡船場・乗客船・荷船 取調書』なる史料綴りが岐阜県図書館に保管されていた。

本史料綴りには、物資を積んだ荷船がどこ(湊あるいは船着き場)からどこ(湊へ向かったのか、ということが記録されている。この出発地点と目的地を「表1 明治一四年における岐阜警察署直轄荷船の出発地及び目的地」のように整理したところ、次の五点が明らかになってきた。

① 厚見郡富茂登村、つまり中河原湊より上流に位置する地点から出発する荷船は、主として中河原湊や下新町湊・上ヶ門町湊への物資の運送に携わっていた。

近世に引き続き、近代に入っても岐阜町を中心とする物資の流通機構が機

能していたといえよう。そして、その中心的な役割を担っていたのが、中河原湊であり、新たに加わってきた下新町湊及び上ヶ門町湊(両湊とも中河原湊の下流に隣接)であった。

② 長良川に流入する支派川・伊自良川に位置する地点から出発する荷船は、主として方県郡岩利村と方県郡木田村を中心とする、狭い範囲での物資の運送に携わっていた。

ところで、岩利村は、地理的観点から見て、伊自良川水系の廻行終点湊的な機能を有していたものと考えられる。近世に引き続き、明治期に入っても、山県郡北部の山間部を後背地とする限定的な物資の運送機構が、岩利村を核として機能していたといえよう。

③ 長良川に流入する支派川・板屋川と伊自良川の合流点に位置する方県郡下尻毛村から出発する荷船は、岐阜町への物資の運送に携わるとともに、伊勢湾岸への物資の運送にも携わっていた。

下尻毛村は、伊自良川の舟運と陸上



絵葉書 帆で風を受けて長良川を上る舟 個人蔵

交通路(本巣郡を通過して揖斐郡へと続く街道)との接点にあたる点とともに、方県郡や本巣郡・揖斐郡という広い範囲(濃尾平野北西部)を後背地としていたことが、荷船をして伊勢湾岸へと向かわせる一因であったといえよう。

④ 長良川本流の川岸を出発地点とする荷船の多くは、木曽三川と海上水運の接点にあたる伊勢国桑名村を目的地としていた。

ところで、桑名村には、天明年間(二七八一〜一七八八)に大坂や赤間関と並び称される米市場が開設されていた。さらに、明治期に入ると、桑名米穀取引所が設けられている。これらの事実から、長良川本流の川岸を出発地点とする荷船の多くが桑名村に向かった目的の一つに、米の運送があったものと考えられる。

近世において、収穫した米の多くは年貢米として領主に納められていたが、明治維新以後は「米」そのものではなく「貨幣」で税を納めなくてはならなくなった。そこで、特に地主階級が、

米の現金化を図る目的で、荷船による運送に直接関わるようになったのである。そのような人々の動きを裏づける伝承として、次のような話を故上島正徳先生(岐阜大学名誉教授・地理学)から教えていただいたことがある。

表1 明治14年当時における岐阜警察署直轄荷船の出発地及び目的地

作成 … 松田 千晴

荷船の出発地点		河川名	荷船の目的地																			
旧市町村名			(美濃国)											(尾張国)		(美)	(尾張国)	(伊勢国)				
			岩	安	木	富	岐	長	河	墨	本	竹	大	蟹	名	津	笠	常	知	桑	四	若
上田村	郡上市	郡上川				◇																
千正村	関市	郡上川				◇																
中屋村	岐阜市	郡上川				◇													○			
世保村	岐阜市	郡上川				◇													○			
加野村	岐阜市	郡上川				◇													○			
芥見村字町屋	岐阜市	郡上川									◇								○			
古津村	岐阜市	長良川																	○			
岩田村字堤外	岐阜市	郡上川					◇												○			
日野村字石仏	岐阜市	長良川					◇	◇		◇		◇			□				○			
長良村	岐阜市	長良川													□			□	○	○	○	○
福光村	岐阜市	長良川													□		□		○	○		
岐阜町字下新町	岐阜市	長良川													□				○	○		
早田村	岐阜市	長良川							◇	◇									○			
若木村字池ノ上	岐阜市	長良川								◇		◇			□				○	○		
東島村	岐阜市	長良川										◇			□				○	○		
八幡村字管生	岐阜市	長良川										◇			□				○	○		
岩利村	岐阜市	伊自良川			◇																	
石谷村	岐阜市	伊自良川			◇																	
交人村	岐阜市	伊自良川	▽																			
城田寺村	岐阜市	伊自良川							◇	◇		◇	◇		□		◇		○			
折立村字三ツ又	岐阜市	伊自良川	▽							◇												
木田村字柿ヶ瀬	岐阜市	伊自良川	▽	▽											□	□		□	□			
黒野村	岐阜市	板屋川										◇			□	□			○			
下尻毛村	岐阜市	長良古川					▽	▽				◇	◇		□				○	○		
鏡島村	岐阜市	長良川								◇			◇		□				○	○		
西庄村字出屋敷	岐阜市	糸貫川													□				○	○		
河渡村	岐阜市	長良川																				
下奈良村	岐阜市	長良川					▽					◇			□				○	○		
加納村字長刀堀	岐阜市	長刀堀								◇	◇				□				○	○		

『明治14年 岐阜警察署直轄 渡船場・乗客船・荷船 取調書』(岐阜県図書館蔵)より作成

岩…方県郡岩利村
安…方県郡安食村
木…方県郡木田村
富…厚見郡富茂登村
岐…厚見郡岐阜町
長…厚見郡長良村
▽…上流への移動

河…方県郡河渡村
墨…安八郡墨俣村
本…羽栗郡本郷村
竹…羽栗郡竹ヶ鼻村
大…安八郡大垣町
笠…羽栗郡笠松村

蟹…海東郡蟹江村
名…名古屋区
津…海東郡津島町
常…知多郡常滑村

桑…桑名郡桑名村
四…三重郡四日市町
若…河曲郡若松(現鈴鹿市)
ツ…安濃郡津

◇…下流への移動(美濃国内)
□…下流への移動(尾張国内)

◇…下流への移動(伊勢国内)

⑤ 長良川より下流に位置し、長良川

本流の川岸を出発地点とする荷船の多くは、桑名村の他に、伊勢国四日市町や尾張国名古屋区も目的地としていた。

ちなみに、名古屋区の場合は、日常生活に必要な燃料(薪炭)の運送も大きな割合を占めていたものと推測される。

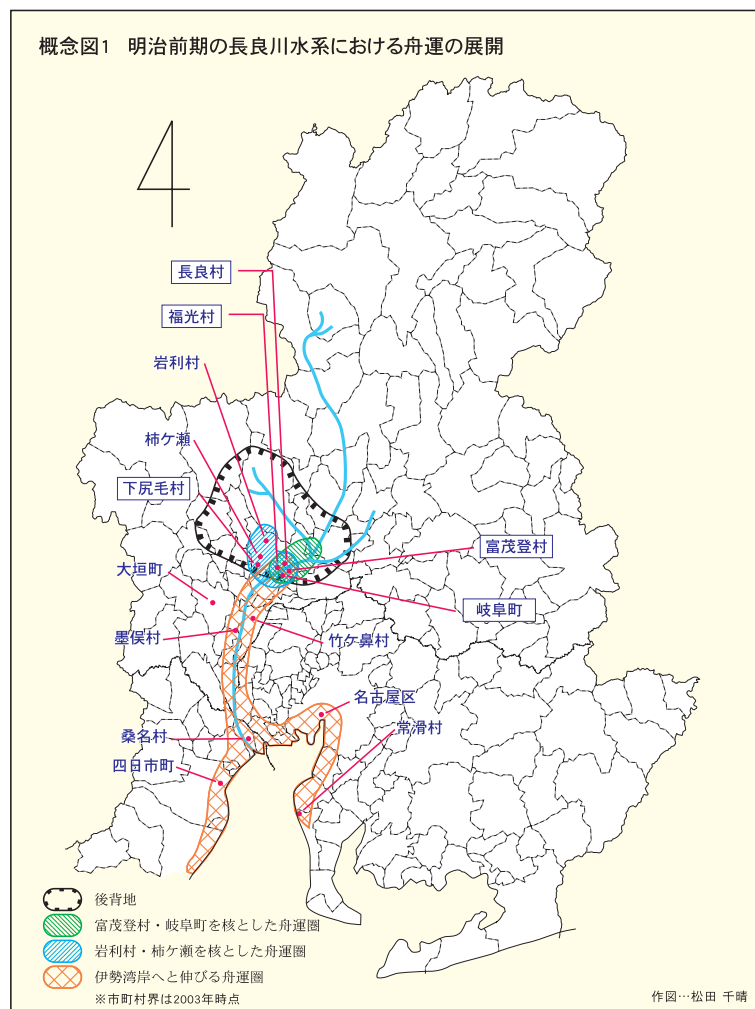
これらの内容にもとづいて舟運の展

関である上ヶ門町湊・下新町湊・中河原湊(富茂登湊)、以上の隣接し合う三つの湊を仮に「近代における岐阜町三湊」と呼ぶことにするが、の移入品目

次に、どのような物資が運送されていたのかということ、『岐阜商工五十年史』(岐阜商工会議所 昭和十五年)から探ってみよう。

二 岐阜町三湊の取扱い物資

開状況を明確にしたのが、「概念図1 明治前期の長良川水系における舟運の展開」である。



及び移出品目を見ると、明治一九年当時、これらの湊に米・雑穀・生糸・茶・紙類・木材・雑貨などが荷船(あるいは檣)によって運送されてきたことが分かる。しかも、これらの物資は、岐阜町とその周辺部で消費されるとともに、岐阜町三湊から下流域(特に伊勢湾岸)に向けて運送されていたのである。

さらに、岐阜町の周辺に位置する厚見郡加納町等^{かのう}で生産された和傘が下流の名古屋区や桑名村を経て大都市へ運送されるとともに、下流域(特に名古屋区や桑名村)からは鉄物や石油・陶

器などがもたらされていたことも分かる。以上が、デ・レーケによる木曾川下流改修工事が始まる直前の、長良川水系における舟運の一般的な状況であった。

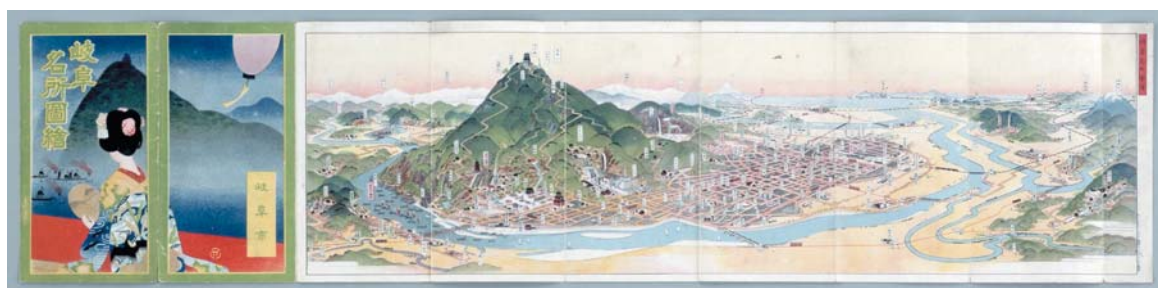
四 おわりに

陸上交通手段が発達していなかった時代、内陸部で物資を運搬するにあつて経費を低く抑えようとすると、河川水運に頼る他に手だてはなかった。そのため、特に近世から近代にかけての我が国においては、驚くほど小規模な河川にいたるまで、一定の水量さえ確保されれば物資の運送に携わる荷船が往来していたのである。

長良川水系においても同じような状況が見られ、従来の研究においては、それを長良川水系の舟運と呼んできた。

しかしながら、今回初めて試みた『明治一四年 岐阜警察署直轄 渡船場・乗客船・荷船 取調書』の分析から、支派川も含めて展開されていた長良川中流域の小さな舟運圏が自らの役割を果たすとともに、それらが繋がり合つて大規模な舟運圏を形成することにより、長良川中流域と同下流域及び伊勢湾沿岸部を結びつける経済活動の大動脈としての役割を担うようになっていた、ということが明らかになってきた。このような舟運の構造というものは、

おそらく全国各地の河川においても見られたものと考えられる。



鳥瞰図『岐阜 名所圖繪』(岐阜市 昭和4年) 個人蔵
この鳥瞰図に描かれている長良川というのは、奇しくも物資を運送する荷舟が行き来していた区域(美濃町辺りから桑名・名古屋)である。デフォルメされた絵であるというものの、流域における生活物資(燃料など)の生産地(山間部)と消費地(都市部)が長良川によって結ばれるとともに、長良川水系の河川水運が海上水運の拠点(桑名湊)とも接続していたことが、目の当たりにできる資料である。

民話の小箱

水よぶコイ

萩 原 わら

むかし、雨が降るたびに、益田川が大変荒れました。荒れ狂う水に削られて、上呂の久津八幡さまの前の川岸も、ほとんど八幡さまの方へ押しよせてきました。「ああ、きょうも雨ふりか」

(このコイと矢の作り物は、久津八幡宮の拝殿のひさしに彫り込まれ、現在も大切に保存されています。)

「こんども、また川の水が増えてくるぞ。」
村の人たちは、川をながめて相談していました。
「このままでは、田畑も道もほりとられてしまう。」
「そのうち、拝殿までも流されるわい。」

すると、長老の弥作じいさんが、
「ありや、拝殿のひさしに彫りこんであるあのコイが水をやぶんやとしか思えん。あのコイを作んなすった和田さま(飛驒の匠)に相談しようと思つとる。」
「言い、翌朝、匠の住んでおられる高山へいきました。」

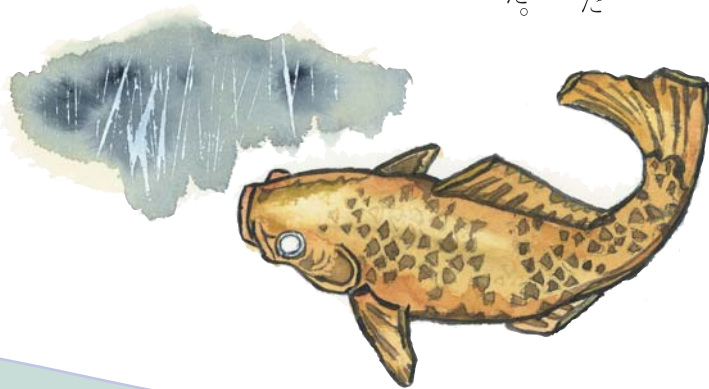
弥作じいのお話をうなづきながら聞いておられた匠は、
「それでは、しばらくこの場でお待ちください。」
と立ち上がり、仕事部屋にはいりました。

トントン、トントントンー
と何やら木をささむ音が聞こえてきます。
しばらく待っていると、

匠が彫りきざんだ矢を見せて、
「この矢を持ち帰って、あのコイにむけて取りつけてください。」と言いました。

そうしてその矢を言われた通りに取り付けたところ、
まったく大水の心配がなくなり、
村は安らかになりました。

村人たちは、これを『水よぶコイ』と名づけて、
語り伝えてきました。



木曽川文庫利用案内

船頭平門
木曽川文庫



《開館時間》

午前8時30分～午後4時30分

《休館日》

毎週月曜日(月曜日が祝祭日の時は翌日)・年末年始

《入館料》

無料

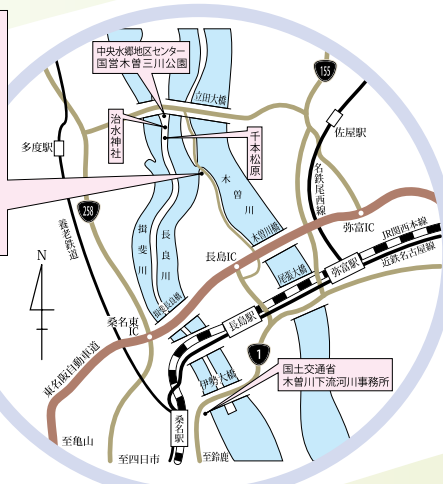
《交通機関》

国道1号尾張大橋西詰から車で約10分

名神羽島I.Cから車で約30分

東名阪長島I.Cから車で約10分

表紙写真▶ 上:龍潭山禅昌寺 中:下呂温泉街 下:飛驒川



木曽川文庫ホームページ
<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>

ぶんこだより

●KISSOの表紙を一新! 内容を一部リニューアル

今号から始まったコラム「木曽三川 一景一話」では、木曽三川についての知識や治水事業の情報などをピックアップして毎月発信していきます。コラムについての感想やご意見、また、取り上げて欲しい事柄や知りたい情報などをぜひ、下記の宛先までお寄せください。

●ホームページからの問い合わせ募集を開始

ホームページから問い合わせいただけるメールを新設いたしました。

まずは下記アドレスからホームページへ

<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>

「お問い合わせ」ページの「メール」をクリック!

木曽川文庫では、蓄積されている地域情報を提供するとともにいただいたご意見・ご要望をふまえ、読者のみなさまが、どなたでも理解しやすい構成とするよう内容の充実につめていきます。

弊誌では、読者のみなさんの声で構成するコーナーを企画しています。身近でおこった出来事、地域の情報などをお知らせ下さい。

宛先
「KISSO」編集

FAX: (0567) 24-5166
mail: kisogawabnk@mist.ocn.ne.jp

『KISSO』Vol.67 平成20年7月発行

監修・発行: 国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所

〒511-0002 三重県桑名市大字福島465 TEL(0594)24-5715

ホームページ URL <http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu>

編集: 木曽川文庫

〒496-0946 愛知県愛西市立田町福原 TEL(0567)24-6233

執筆者: 中村 稔